

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	比較文明学	専攻		
研究代表者 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科比較文明学専攻 博士課程後期5年		小平 健太 印				
指導教員	所属・職名		氏名				
	文学研究科		佐々木 一也 印				
自然・人文・社会の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
研究課題	H-G. ガダマーの解釈学思想における芸術理論の現代的意義の考察						
研究組織 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科比較文明学専攻 博士課程後期5年		小平 健太				
研究期間	2014 年度						
研究経費	(支出金額)	136,130 円 /		(採択金額)	200,000 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究はドイツ人哲学者 H-G.ガダマーの解釈学思想に注目しつつ、その現代的意義の一端を明らかにしようとするものである。多岐にわたり展開された彼の解釈学思想の中でも、本研究はとりわけ芸術経験に焦点を絞り、ガダマーの解釈学理論の実践的適用を図ることを主眼とする。

その上で本研究の目的は大きく分けて二つある。①ガダマー解釈学の理論的基礎づけと、②芸術経験におけるその実践的適用であり、②は結果的には①に資するものである。芸術経験において解釈学理論の実践的適用を図ることで、彼の解釈学理論に対する更なる理解を文献学的な研究方法だけに依らず、この実践的適用の場面をもってして逆照射することを目指す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[現代解釈学] [美学] [比較文明学]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の中心的テーマは、ガダマー解釈学の理論的基礎づけ、及び芸術経験における解釈学理論の実践的応用によるその有効性の検証である。ところで、かかる研究課題の遂行において筆者は、そのプロセスに関して独自の観点を設定していた。まずこの点を確認することから始めたい。

本プロジェクトにおいて筆者は、ガダマーの解釈学理論の研究を〈比較文明学的視点〉をもって遂行することに力を置くものとした。つまり、本プロジェクトにおける一義的な研究成果そのものは、無論ガダマー解釈学思想の基礎づけに直接資するものであり、またそれに値する成果をもたらすものでなければならないが、それに至る過程において常に比較文明学的手法を意識し、自らの方法論そのものを問題化しつつ取り組むことが肝要となる。さらに具体的に言うと、解釈学・美学(感性論)・文化論の三つ観点を視座とし、自らがそれらの集結点に立っていることを常に自覚し理論の構築を図る点に本研究の特色があるといつてよい。こうした理論的前提において、課題遂行のプロセス自体にも本研究の成果を左右する重要な意義が設定されている訳である。しかるに、本プロジェクトの主要課題であるガダマー解釈学における芸術思想の研究成果と、比較文明学的な理論構築の成果と両者を総合して、本プロジェクトにおける最終的な研究成果とする。

さて、これより研究成果の具体的な内容について記述する。まず、本研究が進む道筋についてその概略を示す。

1. ガダマーの主著『真理と方法』において展開されたガダマー解釈学理論における主要概念とテーゼの確認
2. 1. で展開された諸概念・テーゼに関する文献学的基礎づけ、及びその筆者の解釈の提示
3. 1. 及び 2. を踏まえた上で、解釈学理論の実践的適用を図る為の理論的土台の構築
4. 芸術経験におけるガダマー解釈学理論の実践的適用
5. 実践的適用の結果のフィードバック、及びそれに基づく解釈学思想の理論的拡張
6. 総括

1-3. では解釈学的経験(hermeneutische Erfahrung)の基本構造を確認することが主要な課題である。かかる課題の中心的意義は、従来の美学において重要な位置を占めきた芸術経験の基本的様式である美的・感性的経験(ästhetische Erfahrung)に対して、解釈学的経験が有す固有の意義を浮き彫りにし、再度獲得することである。ガダマーが「解釈学的経験」と言うとき、かかる経験の遂行原理として諸々の重要な諸概念が挙げられる。今回とりわけ焦点が当てられたのは、「先行理解(Vorverständnis)」、「歴史・伝統への帰属性(Zugehörigkeit)」、「人間存在の有限性(Endlichkeit)」、「地平融合(Horizontverschmelzung)」である。まず、ガダマー(及びハイデガー)の解釈学思想において、「理解」とは人間が世界と関わる普遍的契機として理論化される。また、あらゆる認識に先立ち理解主体自らの存在を構成する普遍的契機として「理解」が可能である根拠として、ガダマーは「歴史・伝統への帰属性」を主張する。次いで、歴史及び伝統へ帰属する人間存在の固有の性格として、有限的存在者であることが明らかにされる。かかる有限性とは、我々が常に限定された〈歴史状況〉の内に身を置き、そうした意味において常に限定的な視界しか持つことができないという人間存在の本質的態度を言い表している。ではそうした限定性において、我々はいかに世界を経験するのか。その世界経験の基本的モデルが、「地平融合」という理論モデルである。ガダマーが地平融合と言うとき、その最大の強調点は、二つある。まず、理解(解釈)者の地平と理解の対象との地平が合わさることにより大きな地平が形成され、かかる地平に参与するという点。世界経験とはこのような仕方で行われる。そしてかかる世界経験、すなわち理解とは、その内に理解者の立ち位置(地平)そのものがその都度動いていることを必然的に含むものとして規定されるという点にある。このことより、完全な(客観的な)理解とは、歴史的有限性を不当に度外視した抽象化の帰結に過ぎないことが示されると同時に、我々の世界経験とは自らの歴史状況である地平を拡張し、さらなる地平に参与するという「地平融合」モデルとして理論化されるに至る。では、こうした地平融合モデルは芸術作品と対峙する我々の経験において、いかなる意義をもつものであるのか。この問題提起が展開されるのが、続く 4-5. である。

さて、かかる地平融合のモデルを適用するにあたり、まずその効力が比較的容易かつ効果的に発揮されると想定されるジャンルとしてコンセプチュアル・アートの類が挙げられるだろう。例えば、コースス(Joseph Kosuth)の《One and three chairs》は好例である。この作品は、中央に現物の椅子、左にその実物大の写真、右に辞書における椅子の定義(英語)と三つ合わせたインスタレーションである。三つ合わせてひとつの作品なのだから、これが芸術作品である限り、辞書の定義もこの作品の芸術経験に不可欠な要素として我々に要請されることになる。椅子の現物や、その写真はともかく、椅子の定義が作品経験に不可欠の要素をなすということは、作品なり経験なりに感性的・美的(ästhetisch)でないものが含まれていると言えるであろう。そこでは作品を理解の対象とした作品の経験様式として、地平融合のモデルが適用されることになる。我々は作品を通じて、時代、場所、思想の違い、あらゆる隔たり、すなわち地平の違いを経験の本質的契機と見做した上で、それと共に自らの地平が動く(つまり、自らの経験の基準が変更されていく)経験として、地平の融合を経験する。ガダマーの地平融合の理論では、こうした歴史的な自己自覚を

研究成果の概要 つづき

経験の本質として主張し、こうした自覚が際立って現れる一つの様式が他ならぬ芸術経験であることが示されていると言えよう。しかしながら、こうしたコンセプチュアル・アートを例とした理論では、芸術経験のモデルとして予め知性的認識の契機が前提されている対象を扱っている分、主張に公平性を欠いていると思われるかもしれない。また、ガダマーが自らの解釈学において主張した思想内容にも、実は本質的な点において一致しない。ここでこの点について、適用のフィードバックとして触れておこう。

ガダマーは 80 年に公開した論文において、芸術経験の理論を規定している既存の枠組みを解釈学の観点から批判的に解体することを試みている。つまり、知性的なるものと感性的なるものという二項対立図式を解体し、感性的なるものの認識の内には本来的に知性的なるものが含まれていることを示そうとする。このことは、解釈学的思考による知性的認識の立場から感性的経験の可能性を真っ向から否定し、全面的に知性的認識の領野へと芸術経験を引き込もうとする単純な試みではない。プラトン主義の負の遺産が染みついているところではいたるところで隠蔽されてしまっている、芸術経験において働く直観の働きが、本来的には「直観的であること (Anschaulichkeit)」をガダマーは指摘し、両者の構造関係を保持したまま直観に知性的認識の契機が潜んでいることを示そうとしたのである。そこではあらゆる表象が本来的には「直観的であること」であり、現前の表象(直観)はそれに包摂されることになる。直観とそれを包摂する「直観的であること」という両者の関係をもとに、対象の直観ではなく、「直観的であること」をとらえる構想力をガダマーは提示し、感性的な能力である構想力にある種の自発的生産性を認めることで、カント以来の近代美学が前提としていた「知性」と「感性」の図式そのものを解体したのである。ここでフィードバックと先の議論を合わせれば、解釈学の立場にとって重要な点は、芸術経験において知性的認識の優位性を単に主張することではなく、芸術経験の内には本来的に知性的認識の契機が含まれていることを指摘した上で、解釈学的経験の包括性を主張することであつたと言えよう。では、こうした解釈学の立場が芸術作品の内に美的なるものを見出そうとする理論をいかに包摂し得るのであろうか。次いでこの点を検討しよう。

今回かかる問題意識のもと適用を試みたのが、ラスコー壁画及びそれに関するバタイユ(Georges Bataille)の芸術思想である。バタイユはフランスの片田舎で子供たちによって偶然にも発見された先史時代の洞窟絵画を優れた芸術作品と見做し、そこに高次の美的契機を見出そうとする。時代的に大きな隔たりを有し、これまで未知なる対象であった壁画に対して美的なるものを見出すバタイユの思索を、同じく歴史的対象の理解及び芸術経験の理論を扱う解釈学の立場がいかに包摂し得るのであろうか。両者の立場を考慮に入れ、理解概念の拡張を試みる。

かかる理解概念の拡張という点に関して、まずバタイユの思索にはガダマーの解釈学思想に対してある優れた点が存している。ガダマーは芸術作品を過去の生的連関から切り離された純粋な美的対象としてとらえることに反対していた。解釈学的な理解の経験を人間存在の根本体制とする立場から、美的経験というのは、作品をそうした生の連関から切り離した上で行われる不当に抽象化された非本来的な経験である。ここには解釈学的経験の断絶が存在すると言えよう。他方でバタイユは、祝祭や呪術的行為といった当時の生の連関の内に作品を位置づけることに一定の効力を認めながらも、それではまだ十分ではないと言う。というのは、そうした生の連関への位置づけは、どうしても目的論的価値観および不用意な比較解釈法によって本来的な芸術の意味への通路が阻害されてしまうからである。では、そこでバタイユは芸術の意味をどこに見出したか。それは、芸術を通じて彼らが初めて革新的に人間となる一すなわち、何かを描き表象することで、バタイユの言葉を借りれば「人間とそれを取り巻く世界との自由な交感」が初めて行われたという「誕生」の事実の発見そのもの内に見出される。すなわち、バタイユは祝祭および呪術といった作品の本来的な生的連関を保持しつつ、そこに(作品の)歴史的理解の契機を持ち込みながらも、それに留まらず、その次元を超えて表象すること自体にまで理解の適用範囲を押し広げているのである。さて、こうした理解概念の拡張からは、「比較」という方法的概念が原理的位置づけを得る可能性が見いだされると筆者は考える。では最後に、かかる理解概念の拡張に対する比較文明学的観点から見た成果を述べておきたい。

結論的に言えば、こうした理解概念の拡張において「比較」—当時の生の連関の内に作品を位置づけること—は理解の補助手段として機能する以上に、表象と理解とを結びつけるための不可避の原理的地位を占めていると言える。というのは、ここで理解は比較を本質的媒介として自らの内に含むことで、生の連関をとらえつつもそれを越えて、芸術(表象)を通じて初めて人間が人間となるという事実の発見(真理生起)へと結び付くからである。かかる考察は、比較という方法論的概念が有す重要な意義を示している。すなわち、歴史的対象の把握において比較という営為が、単なる客観主義的同時化という対象把握の形式に陥ることなく、不当な先入見をできる限り排除しつつ、対象把握の普遍的様式として地平融合の過程の内に組み込みこまれ、またこのことが芸術経験を通じて示された点である。比較を学的営みの本質とし、さらに比較自体の意義を問うことを使命とする比較文明学にとってもまた、こうした比較営為に対する解釈学的な基礎づけは本プロジェクトにおける有益な成果の一つと言えるであろう。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

比較文明学会第32回大会学会発表(於西南学院大学)

「比較」と解釈学—比較行為の根源的性格に関する解釈学的考察—

日本ディルタイ協会関西研究大会発表(於大阪教育大学)

解釈学的経験と構想力の問題—後期ガダマーの芸術理論を手がかりとして—